# 広がるバイオディーゼル

## 愛知・三河で地産地消

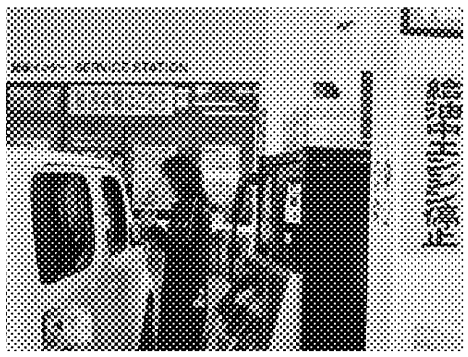
### 産業の脱炭素需要つかむ

愛知県三河地方でバイオディーゼル燃料をめぐって供給、製造者の動きが活発化している。ガソリンスタンドを運営するマルシメ（愛知県豊橋市）は2日、太陽石油系列の直営スタンドでバイオディーゼル燃料の販売を開始。サーラエナジー（同）は豊橋市のゴミ収集車に5月から同燃料の供給を始めた。またレボインターナショナル（京都市下京区）は4月に田原市で同燃料の生産拠点を稼働した。脱炭素社会実現に向けサプライチェーン（供給網）が強固になりつつある。

（名古屋・星川博樹）

マルシメが扱うのは軽油に脂肪酸メチルエステル（FAME）を5％未満混合する「B5軽油」。直営スタンドは愛知県新城市の第2東名高速道路インターチェンジ近く。直営スタンド近くでダム建設工事が進んでおり一般消費者向けと併せ、バイオディーゼル燃料の導入が進む建設業者向けに供給する。同社は年内に豊橋市内で新たに供給拠点を開設する計画。「まずは建築・土木関連の需要をとらえる」と同社の大熊康丈社長は狙いを明かす。

サーラエナジーは2024年10月から豊橋市の公用車向けに試験供給をスタートした。同社は07年にバイオディーゼル燃料の取り扱いを開始。東三河と静岡県西部の飲食店など1000軒から廃食用油を月間2万リットル回収し、同2800リットルの同燃料を供給している。「地産地消のエネルギー」で、脱炭素にも貢献する。需要を拡大したい」と同社の担当者は意気込みを語る。



愛知県新城市でB5軽油の販売を始めたマルシメの直営店

レボインターナショナルが田原市に持つ愛知工場は、同燃料を1日当たり3万リットル生産する能力を持つ。地域製造業のボイラーや産業車両の燃料需要を見込む。同工場は持続可能な航空燃料（SAF）の生産も計画している。

バイオディーゼル燃料は政府が脱炭素社会の実現へかじを切ったことで、公共事業の入札に影響する建設業界などで需要が拡大している。ただ価格は通常の軽油よりも1リットル当たり10―20円高くなることから、トラック業界などでは採用が進んでいない。

現状、バイオディーゼル燃料は100％（B100）なら軽油引取税は課税されないが、混合すると全量に税が課せられる。このこともバイオディーゼルの割高感につながる。関係者からは「脱炭素に貢献するバイオディーゼル燃料分については非課税にすべきでは」との声が上がっており、今後は同燃料普及へ政府、自治体への対応を求める動きも出てきそうだ。

無断転載・複写禁止 ㈱日刊工業新聞社